

//REPORT//

令和4年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

11/16 開催 第3回 「1 から知る UNESCO」



ユネスコスクール事務局では、令和2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を1～2か月に1回のペースで実施しています。今年度第3回目は「1 から知る UNESCO」と題して、10名の参加者と対話の場をもちました。

■プログラム

開催日時:2022年11月16日(水) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	オープニング 趣旨説明 ACCU教育協力部 部長 大安 喜一
16:05	話題提供 元ユネスコ職員／元九州大学教授 山下 邦明 氏
16:25	グループディスカッション 話題提供を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:45	振り返り グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。 (良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:00	クロージング

■ 話題提供

元ユネスコ職員/元九州大学教授の山下邦明氏よりご発表いただきました。山下氏は大学在学中にユネスコ憲章と出会ったことをきっかけに地域ユネスコ協会へボランティアで参加され、その後、日本ユネスコ協会連盟、ユネスコ本部、大学等の様々なお立場で50年に渡ってユネスコに携われたご経験をお持ちです。そしてそのご経験をもとに執筆された著書『「心の中に平和のとりでを築く」に魅せ

られて ユネスコを通して出会った人々との軌跡 50 年 国際協力・国際機関人材育成シリーズ』が 2022 年 4 月に出版されました。今回は著書の内容を中心に、話題提供をしていただきました。

以下、概要です。

ユネスコはユニセフと同じ UN(国連)ファミリーであり、ユネスコ本部事務局はパリにあります。山口県出身の松浦晃一郎さんがユネスコ事務局長を 1999 年から 2009 年の 10 年間勤めていました。松浦晃一郎さんはアジア初の事務局長でした。

今回は「1から知る UNESCO」ということで、はじめにユネスコ誕生の歴史についてお話ししたいと思います。第一次世界大戦後、国際連盟が成立し、国際連盟の下部組織のような形で「国際知的協力委員会」ができました。新渡戸稲造が事務局を担当しており、メンバーにはキューリー夫人、アインシュタイン、ベルグソンなどがいました。名前の通り、知的な協力を通して世界平和を目指すことが目的とされていました。その後、国際連盟そのものが解体され、「国際知的協力委員会」もなくなりました。当時、ナチスドイツがヨーロッパ各国を占拠し、それぞれの国の亡命政府がロンドンに置かれていました。この亡命政府 14 か国の文部大臣がイギリスの提案により集まり、1942 年に会議が開かれました。この会議では戦争後の教育復興について話し合われました。その後、アメリカやソ連も参加しました。当初は「教育復興」(E: Education)について考えており名称は「UNEO」でしたが、その後文化(C: Culture)も含んだ「UNECO」(1945 年 7 月)、そして科学(S: Science)を含んだ「UNESCO」(1945 年 11 月)へと変化していきました。ユネスコのキーワードとしては「国際理解」「異文化理解」「国際協力」「生涯学習」「人権、平和、自由、民主主義」が挙げられます。1996 年にジャック・ドロール委員長を主導とし、『21 世紀の教育国際委員会報告書「学習：秘められた宝」』が出版されました。21 世紀の学習の 4 本柱として、「to know(知ることを学ぶ)」「to do(為すことを学ぶ)」「to be(人として生きることを学ぶ)」「to live together(ともに生きることを学ぶ)」が提案されました。私はこの報告書の翻訳に関わり、4 本柱の翻訳も私が担当しました。

次に、ユネスコと日本の関係についてお話します。第二次世界大戦後、最初に日本を受け入れた国連機関がユネスコでした(1951 年)。ユネスコは設立当初から東西文化交流促進事業を行っており、その事業の一環として川端康成の作品も英語やフランス語などに翻訳されました。それが最終的にはノーベル文学賞受賞へとつながりました。他にも、日本は津波警報の世界ネットワーク作りをユネスコとともに行っています。1946 年のユネスコ成立後、民間でユネスコに協力する会が全国的に立ち上がっていきました。1947 年には世界で最初のユネスコ協会が仙台で誕生しました。この活動の中心人物は、外務省の上田康一さんでした。上田康一さんは外務省より宮内庁へ出向され当時の皇太子ご夫妻のお世話をされていた人物でもあります。また当時の皇太子と縁深い人物として、高校時代の担任の越田稜先生(学習院高等科ユネスコクラブ顧問)が挙げられます。私は当時、皇太子ご夫妻とお話しする機会があったのですが、お二人ともユネスコについてのご理解が深いことが分かりました。

私の経験としては、1987 年にマイケル・ジャクソンが来日した際、縁があり、彼と直接話をする機会を得ることができました。そこで彼に日本ユネスコ協会連盟への協力をお願いすることができました。オークションや記念メダルの販売を通して約二千万円の資金を得ることができました。この資金をもと

に世界寺小屋運動をスタートすることができました。彼は「コーアクション」という言葉に惹かれたそうです。お金を出す側ともらう側が一緒になって、アクションをする発想が気に入ったとのことでした。

20代の頃には二名の方との出会いがありました。一人目はアレック・ディクソンさんです。アレック・ディクソンさんは、海外ボランティアサービス協会(Volunteer Service Overseas: VSO)を立ち上げ、当時兵役義務があったイギリスにおいて、海外でのボランティア活動を兵役の代わりとすることを提案した人物です。また国内の地域社会でもボランティア活動が必要と考え、コミュニティー・ボランティア協会(Community Service Volunteers: CSV)を設立しました。私はアレック・ディクソンさんから、「ニーズとニーズを結び付ける想像力を鍛える」ことの大切さを教わりました。この具体例として、アレック・ディクソンさんが立ち上げた「外国人でもボランティア活動ができる」事業があります。イギリスには語学留学のために滞在している外国人が多くいて、彼らは「実践的に英語を使いたい」というニーズもっています。他方、イギリスには一人暮らしで、「話し相手が欲しい」という高齢者もいます。その二つのニーズを結びつけ、外国人が高齢者の家に訪問するボランティア事業をつくったのです。また別の例として挙げられるのが、少年院にいる子どもたちのボランティア活動です。少年院に入っている子どもたちが求めていると考えられる「スキンシップ」というニーズと、視覚障害の施設の人たちの「外出の時などそばにいて手をつないでほしい」というニーズを結びつけ、アレック・ディクソンさんは少年院にいる子どもたちを少年院の外に連れ出しました。「ニーズとニーズを結び付ける想像力を鍛える」という発想は、学校でも活かすことができるのではないのでしょうか。

もう一人、私に大きな影響を与えてくれたのがアリアラトネ博士でした。アリアラトネ博士は1958年にスリランカで仏教哲学に基づく農村開発運動「サルボダヤ・シュラマダナ」を創設した人物です。「サルボダヤ・シュラマダナ」は「意識の目覚め(意識の改革)」「労働の分かち合い」を意味し、みんなで分かち合いながら農村を良くしていこうという活動です。マイクロ・クレジットはもともと「サルボダヤ・シュラマダナ」ではじまっており、そのアイデアをバングラデシュで展開したのがモハマト・ユヌス氏です。アリアラトネ博士から私は国際協力に関わる上で必要な4つのワーク:「フットワーク:すぐに行動を起こす軽やかさ」「ネットワーク:幅広い人間関係を大切に作る」「フィールドワーク:現場に根差す」「ライフワーク:一生継続ける」の大切さを学びました。

ユネスコスクールで学ぶ若い世代に向けて、私は「人徳」、友だちをたくさんつくること、ヒューマンネットワークをつくることをおすすめしたいです。また現在日本では「ユネスコ未来共創プラットフォーム」の取組が進められており、「ユネスコ」の冠を付けた国内の機関・団体・施設の連携が図られています。今後ますます「共に創る」アクションが大切になるでしょう。ユネスコスクールの皆様にもユネスコ協会・地方自治体との連携協力を図ることを大切にいただきたいと思います。日本には「ユネスコ活動に関する法律」があり、国又は地方公共団体が民間のユネスコ活動に協力したり援助を与えたりすることが可能となっています。このような法律があることは世界に誇っていいことなのではないのでしょうか。

最後に、私は未来を担う若い人たちに「たけのこ族」になってもらいたいと考えています。私は今まで様々な形で国際協力に携わってきましたが、関わってきた人たちは4つの要素を持っていると考えます。もう一度会ってみたいくなるような「た」楽しい人、相手の立場を尊重できる「け」謙虚な人、前向きな「の」伸び伸びした人(ネクラでない人)、「こ」心と志のある人。この4つの要素を「こ」言葉(外国語)

にのせて伝えていく人、この「たけのこ族」がグローバル人材であると考えています。皆さんの学校でぜひこの「たけのこ族」を育てていただきたいと思います。

■ 振り返り

山下氏の話提供を受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- ユネスコスクールの状況を考えると、日本のユネスコ加盟への歴史や原点という観点が教職員の視点から抜けてしまっていることが課題ではないか。日本がユネスコに加盟する際、反対した国々があった一方で、平和構築のためには日本の存在が重要だと賛成した国々もあった。このような背景を教職員が理解する必要があるのではないか。
- ユネスコスクールとユネスコ協会が協働しながら、ユネスコスクールがユネスコ協会を元気付けるような活動を展開していくことも可能なのではないか。
- 山下氏に向け、ユネスコの未来ビジョン・一番重要な課題は何かという質問が出た。
(山下氏からのご回答)昨年新しく "[Future of education](#)” という新しい報告書がでた。今後の教育がどうあるべきかについてステークホルダーみんなで考えていこうという提言の報告書である。よって今後の教育のあり方を考える場を設定していくことが望ましい。
- 「ニーズとニーズを結びつける」というお話が特に心に残った。
- 「ユネスコがユネスコスクールに望むことは何か？」と考えてきたが、本日のお話を受け、「たけのこ族」の育成がそのひとつとして挙げることができると感じた。



[オンライン意見交換会の様子]

※次回は、2022年12月19日(月)16:00～17:00「地域と共に生きる ～ESDの学びから～」というテーマで開催します。お申込み方法などの詳細は、[ユネスコスクール公式サイト](#)内「最新情報」、[ユネスコスクール公式 Facebook](#)に掲載中です。ぜひご参加ください！